

# インド・グジャラート州の女性酪農協同組合の展開

## —アムダーヴァード県ドゥーマリ村の女性酪農協同組合の分析—

中 里 亜 夫

(2000年9月11日受理)

### はじめに

インドの「白い革命」<sup>1)</sup>は、グジャラート州カイラ県 (Kaira, 現ケーダー-Kheda 県) アーナンド (Anand) で誕生したカイラ県酪農協同組合連合 (Kaira District Cooperative Milk Producers' Union Ltd.) をモデル<sup>2)</sup>にしての全国的普及 (1970年から始まる) により達成された (中里, 1999a, b)。その組合連合の母胎となったアムール (AMUL, Anand Milk Union Ltd) の設立の当初から女性を組合員に加入させることに疑義や強い反対はなかった。このアムールにみる協同組合酪農の先進的性格が今日の女性酪農協同組合の大きな前進を約束させたのである。

インド社会, 特に農村は男性優位社会の性格を濃く残していることから, 酪農協同組合の管理・運営はあくまで男性主導で酪農業は発展してきた。しかし, インドの酪農業の内実は女性の労働により支えられ, 飛躍的な発展をみたのであり, 今後も女性により担われる産業であることは, 1979年にアーナンドで開催された国連主催の「酪農業への女性参加に関するワークショップ国連婦人の10年」で明らかにされたことであり, それはひとりインドだけでなく他の南アジア諸国でも同様である (United Nations, 1981, p.10)。1970年代はじめにアムダーヴァード市で誕生した NGO・SEWA (Self-Employed Women's Association, 自営女性労働者協会) は, 都市のノンフォーマル分野で働く女性を組織化することから始まり, 農村女性の組織化を行うことで女性の就労, 地位向上, 自尊心やエンパワーメントを支援する為の活動を行ってきた。その SEWA が, 1970年代後半からアムダーヴァード県下でウシの世話や搾乳・販売にと身を粉にして働く女性を組織化した酪農協同組合の一つが, ドゥーマリ (Dumali) 女性酪農協同組合である。

インドは, 世界第2位のミルク生産国である。世界銀行レポート (World Bank Report, 1996) では, 「白い革命」の成功を認めつつも, 「現状の

ミルク産業は持続可能な産業ではない」とする見解は筆者のフィールド調査の結果と一致する。だが, セワの理事長 (General Secretary) バット女史 (Ms Elar Bhatt) は, インド酪農の将来は, 「女性と女性組織の全参加による地域の資源の再生次第である」とする見解 (E. Bhatt, 1996) に耳を傾ける必要がある。さらに興味深いのは, この「白い革命」を実質的にも推進した NDDB (National Dairy Development Board) のナンバー・ツーであるアムリータ・パテル (Amrital Patel) は女性であり, 彼女は自由化政策下での個人経済化の影響が酪農業に大きな影響を及ぼしていること, これを防ぐには協同組合組織の強化である。その為の教育の重要性を主張している (A. Patel, 1996)。パテルが女性であり, インド酪農開発の政府機関である NDDB (National Dairy Development Board, インド酪農開発局) の最高幹部であることが, 政府の進める STEP (Support To Employment Promotion) プロジェクト<sup>3)</sup>による女性酪農協同組合の展開にとって大きい影響があるのではと推察する。

この小論は, ドゥーマリ村を訪れる機会を得て日本人学生とインド人アシスタントと共に村に1週間通い, 親交を深めながら村の経済と酪農経済との関係, 特に女性組合員の労働の現状の一部を得られたデータをもとに分析し叙述したものである。この村を選んだのは, 既にマーティ・チェンら (Marty Chen and Anila Dholakia, 1986) の詳細な研究があること, さらにこの村のあるドルカー (Dholka) 地方の一村の優れたモノグラフを著したマルタ・チェン (Martha Alter Chen, 1991) や篠田 (1995), 柳沢 (1995) らのフィールド研究があったからである。そして, なによりも筆者のケーダー県下の農村調査からバルワード (Bharwad, 伝統職は羊飼) 調査の必要性を感じてきたことである (中里, 1995a)。近年, SEWA に関する研究も行われている (甲斐田, 1996, 喜多村, 1998)。

なお, 現地調査にあたっては, ウッターム・デ

イリー (Uttum Dairy) やセワの協力を得たこととドールカー市内で宿泊できるアシュラムを利用して頂いた。

フィールドでの資料収集は、調査期間(7日間)に限りがあり、酪農組合員(1992年登録者87名)<sup>4)</sup>から21名を選定し、面接調査を行った。その際の対象組合員の選定は、酪農業の担い手であるバルワード・コミュニティを中心に主に飼育規模により選定し、その他は各ジャティーから2~3名程度を選定した。その後、1996年と1997年の2回の、各1日間だけの補足調査をおこなっている。

## 一) グジャラート州の女性酪農協同組合の現状

### 1) 女性酪農協同組合設立の経緯

インドで最初の女性酪農協同組合が、何時、どこでという疑問にこれまでまともに答えた研究は管見の限りではない。筆者はこの問題に関しては全国レベルでは、以下のような三つの時期に分けるシナリオを描いている。

第一期 アムール酪農と女性組合員  
(独立時から1970年代)

第二期 NGOの組織化による女性酪農協同組合  
(1970年代後半から1980年代)

第三期 中央政府のSTEPプロジェクトによる女性酪農組合の激増  
(1990年以降)

ここでは、グジャラート州を例にして、第一期のアムール酪農と女性組合員、第二期ではNGOつまりSEWAの組織化について、第三期では、SEWAの組織化した女性酪農組合について以下検討する。

### 2) アムール酪農と女性組合員 (独立時から1970年代)

今日のインドにおける白い革命(酪農革命)の誕生地はインド西部のグジャラート州アーナンド(Anand)市であり、革命の発端は市内にあるアムール酪農である。このアムール酪農の成長・発展の詳細に関しては拙稿(中里, 1999a)に譲るが、ここではアムール酪農の特徴である酪農協同組合の組織化と女性の関係を検討しよう。

問題の基本は、アムールの構想する酪農協同組合の組合員には、乳畜の飼育者であることと組合加入の登録料金1ルピーを支払いさえすれば、カーストやジェンダーに関係なく誰でもが参加できると言うことである。この考え方が何処から生まれたのか詳しくは知れないが、基本はガンジー思想と独立運動の過程及びアムール酪農の発展過

程で、特にサルダール・パテル(Sardar Patel)<sup>5)</sup>の居住した、またアムール酪農の誕生を見たカイラ県下で実質的に獲得・定着したものであろう。

まず、アムールは、1日500リットルのミルクを集荷できる組合を作るために2~3村で一つの酪農協同組合を作り、25人の組合員で1日100リットルのミルクを販売できることが、アムール酪農協同組合に登録できる最低の条件とした。組合登録すると、まず各組合は中心母胎のアムールからミルクの検量・検査用具を揃えるために1万1000ルピーの助成金を得る。そしてミルク生産者が3ヵ月間連続して組合にミルクを販売することで、組合員として登録される。そして、彼らは、常にその組合にのみミルクを販売する。ちなみに、登録料は1ルピーである。そして、1世帯当たり協同組合の責任シェア一分を二人分受け持つという条項があるが、男性の名前であれ、女性の名前であれ、酪農家は伝統的に男性世帯主の名前のみの一人分の購入が普通であった(United Nations, 1981)。

このアーナンドに本拠を置くカイラ県ミルク生産者組合連合は、1960年代後半には、既に酪農開発において女性の役割がキーとなることを認め、その指導者達は、男性の手を借りることなく直接に女性向けの実地及び技術研修を計画実施した。特に人工授精の技術とプログラムを理解させることで、品種改良、規則的な出産を広めたり、また妊娠牛への給餌と管理に大きな影響を与えたのである。協同組合の報奨制度は女性を引きつけ、ミルク生産の増大をもたらした。女性が村の酪農協同組合の運営に参加することを通じて、意志決定に重要な役割を演じることとなった。独立戦争期に培われた女性の社会参加の伝統が大きく貢献した。政治や社会福祉に対して男性と肩を並べ活動すると言うことが、この西インド・グジャラートでは珍しくないのである(H. Somjee and Geeta Somjee, 1976)。しかし、シャー(Shah, D. 1992. p.26)は、ジェーン(Jain, D, 1976)らの研究を引用して、1970年代のケーター県下の10酪農協同組合の調査から、女性組合員の参加は満足のいくものではなく、その割合は2~10%の間でしかなく、しかも女性の管理・運営や金銭的な支払いにはほとんど関与してないこと、そしてカースト、家族計画および衛生面での態度変化を示唆するデータは得られなかったとする結果を紹介している。

ちなみに、1978年、カイラ県下には481酪農協同組合があり、171,338人の組合員がいた。当時、女

性組合員の割合は、10.56%を占めていたが、女性組合員が総組合員の50%を越える組合はなかった<sup>6)</sup>。しかしながら、例外的に女性だけで組織した酪農協同組合が一つあり、それが以下に述べる、カードゴダラー (Khadgodhara 村) 酪農協同組合である (A. H. Somjee and Geeta Somjee, 1976)。以下、ソムジーらのレポートを抄録することで、女性酪農協同組合協同組合の設立経緯をまとめた。

#### a) カードゴダラー女性酪農協同組合協同組合の設立経緯

インドで最初の女性酪農協同組合は、このカイラ県のカードゴダラー村で1968年にカイラ連合会の主催したセミナー「協同組合酪農がいかにか村民の生活水準を上げるか」に村の村長であるブラーマン女性の出席が最大の契機となり、カイラ県酪農協同組合連合の協力を得て村の女性とともに設立した組合であろう。

この村の道はアーナンドから遠く離れた80kmの位置にあり、しかも貧弱な道路の為にアクセスは悪く、おまけに電化もされていない村である。アウトローの避難場所であり、行政官にとっては、そこは島流し的な場所であった。しかし、酪農協同組合が出来ての10年間で、村の経済と社会的生活は急速に変わったのである。

村に酪農協同組合を作るに当たり、最大の障害は、2 km 離れた位置にある他の酪農協同組合であった。当時、村の女性は1日2回、ミルクをそこまで運んでいたが、彼女らはほとんど興味が持てなかったため、特にモンスーン期にはミルクを浪費した。またその組合の組合員にはなれなかったため、ミルクを販売してもボーナスを貰う資格がなかった。このような不満足な状況を変えたのは、ブラーマンの未亡人が1967年に村会議員に選ばれ、そして翌年には議長つまり村長となったことである。

この村経済の管理・運営の責任を交代させたのは、女性村長のリーダーシップと社会的平等の規範が共に村民に受け入れられてきたからである。もう一つは、村の人口の大半は、ヴァンカル (Vankar, 指定カーストで伝統職は織工) とモスリムとで占められ、しかも村のミルクの大半はこの二つのコミュニティによるものであったことである。特に、酪農協同組合のある隣村の人々は、ヴァンカルの女性が組合にミルクを運ぶことを妨害した。モスリムの場合は、男性がミルクを運んだ。このような結果、ヴァンカルとモスリム女性の間では、新しい協同組合に加わることに口説き

は必要なかった。ブラーマンの未亡人は、少なくとも1世帯1人の女性を組合員として登録することに成功した。これは、まさにカイラ連合の指導者を驚かす離れ業であった。今日、全ての株主と指導者は女性である。

女性の管理運営に関して、これまで男性との対立はない。つまり、設立以来、男性からの彼女らの働きに関する疑問や彼女らの職に関するねたみはないのである。

農業労働は中・老年や病弱の未亡人には、チャンスはない。村の未亡人は、酪農協同組合による水牛購入のローンの再開のアナウンスのある時はいつでも、彼女らはその機会を最大限に利用する。実際に、貧困からの脱出は、このようなローンの利用に依存しているのである。多くの村では、債務不履行のために、ローン制度はうまく機能しておらず、一つの例では、ローンを受けるのに6年間も待たねばならないのである。

協同組合の効果としては、ミルクの生産と販売による現金収入の増加にある。特に貧しい女性が現金を入手すると、さらに水牛を増やしたり、土地の購入、家屋の修理や装飾品を購入する。ミルク収入は、女性にとって思い焦がれるお金となり、主人・男性も彼女らの要求を認めるようになったとしている。そして、この酪農協同組合は、近代技術、組織及び制度により結実した村のシンボルとなった。そして重要なことは、彼女ら自身が健康に関する考え方をウシ飼育・管理を通じて変えていったことである。

インド酪農の発展は、経済成長に関して女性が主役を演じることの出来る期待・展望に道を開いたと述べている。現地調査で得た感触から、この著者達の酪農産業と貧しい女性達への期待は大きく膨らんだようであるとしている。

#### 3) 第二期 NGO・SEWA の組織化による女性酪農協同組合

1972年に、アムダーヴァード市内のインフォーマル・セクターで働く女性労働者達の組織運動を契機にしてセワの活動は開始した。マハトマ・ガンジーの哲学つまり非暴力と真実の道を歩むことによって社会的変化を起こすよう組織された。つまり貧しい女性自らが、「戦い」と「発展」と言う双子の戦略を通じて経済の主流に加わる運動である。このセワの組織と運動は、(1)労働運動 (Labour movement), (2)協同組合運動 (Cooperative movement), (3)女性運動 (Women's movement) とにより強化されている (SEWA report 1993)。この

ような運動の背景には、貧しい女性達こそが、開発・発展の先駆者になれる確信がある。

セワの目標は、(1)完全雇用 (Full-employment) と(2)自立 (Self-reliance) を実現する為に就労者を労働組合や協同組合に組織化することである。セワに加入することで、信用、法律上の援助、取引、保健そしてデイ・ケア等の多様なサービスを受ける資格を得た2.5万人の女性達すべては、各自の労働・職業に関する問題に取り組むべく労働組合に組織された (SEWA report 1993)。

1975～77年に、初めてセワは農村地域でのインフォーマル・セクターで働く女性労働者の組織化を試みた。その目的は、女性の日雇い労働者の最低賃金を要求する為の組織を作ることであった。いくつかの衝突や暴力事件 (日雇い労働者と地主・警察官との) の後に、農業労働者組合と協力関係にあるセバは6～700人の農業労働者を組織することに成功した。その結果、彼女達の日当は多くの地域で増えた。けれども、彼女達の就労が常に季節性に規定される為に、例え最低賃金の要求が成功しても、次の雇用の際にはまた以前の条件つまり最低賃金を下回る賃金が提示されるなど、かち取った要求が持続されないことを知った。つまり、彼女達は、慢性的な失業と代替的な就労機会を欠くために、雇用主との交渉能力を持たない弱い立場に置かれているのである。このような未組織の農村労働者の主要な問題は、失業である。季節的に失業する人々の組織化の為に、生産的資産もしくは代替的就労の機会を保証する為にも、1980年に、セワはドールカー郡の15村落に開発活動を行うことを決定した。

この開発計画の前の1978年に、NDDB にアプローチした。その理由は、NDDB による貧しい農村女性の為の市場経済を創成するプロジェクトが始まることを知ったからである。そのプロジェクトでは、農村の女性を研修・訓練して、酪農協同組合を設立するというねらいがあった (Rose, K, 1992)。NDDB の1978～79年度報告書のなかに、「アムダーヴァード市内の、SEWA の支援で36人のラーバリ (Rabari, 伝統職, 牧畜民) 女性が新たな研修プログラムを受けて、協同組合について教え込まれ、しかも牛の管理と世話の仕方を教える」(NDDB, 1979, p.5) とある。これは、サバルマティー・アシュラム・ゴジャラ・プロジェクト (Sabarmati Ashram Daushala Project) として、3日間の研修を通じて、人工授精と初歩的獣医治療の技術をマスターすることで、獣医や人工授精師の現場でアシスタントとして働く力を付け

ることであった (NDDB, 1979, p.35)

セワの活動は三つの段階に分かれる。

第一の段階 (1978～80年) は、NDDB のサルダール酪農 (Sardar Dairy) と共に、ドルカ郡内の15ヵ村落に対してミルク集荷ルートの確定と酪農組合設立の為にジャゴ (Jaago) プロジェクト地域を詳細に調査した。その結果10ヵ村落が興味を示した。セワは自らはウシを所有しない貧しい女性の自立を支援する関心から、家畜飼育や酪農経営の為の研修に参加したり、搾乳ウシ購入の為にローンを借り受けることに関心のある女性を選び出す調査をおこなった。既述したが、セワはNDDB と提携することで選び出した20人目の貧しい女性を1978年4月、5日間コースの研修に送り出した。こうして、1979年に最初のセワの組織した女性酪農協同組合が設立された。

ミルクの出荷が始まるとミルク仲買人や個人酪農、村落の有力者などが妨害を始めた。その為にセワは、この第二段階 (1981～82年) では、ウシ購入の回転資金の確立そして酪農研修コースと実用本位の識字学級を開始することで、女性酪農を支援した。1982年は行政官がセワの息のかかったメンバーを脅迫したり、村長がメンバーを脅して手に入れた水牛を売却させたり、また組合へのミルク販売を妨害した。またセワに反感を持つミルク仲買人により、運搬中のミルクが強奪されたり、土地なしハリジャン女性の組合長 (酪農組合) は社会的にも恐喝されたりした。この時期に、セワの組織した7つの組合のうち、4組合が生き残った。

第三段階 (1983～85年) は、協同組合の地固め・安定させる段階であり、その為に女性酪農協同組合の女性スタッフの強化を図った。つまり、女性酪農協同組合の外部からと村内からの幹部養成の為に、州都ガンディナガールに1ヵ月間の訓練を受けさせた。1984年の始めまでに訓練された。さらにサルダール酪農でミルク検査の技術を得て、4つの酪農組合でそれぞれ管理・運営に当たらせたとである。

## 二) NGO・セワの組織化したアムダーヴァード県下の組合の集乳状況一

NGO・セワが農村活動の一つとしてミルク生産に関わる女性を組織し酪農協同組合を1979年に設立したのが県下で最初で、今日では30の女性酪農協同組合が見られる。その後増加して、州内では350余り (1996年) の女性酪農協同組合がある。こ

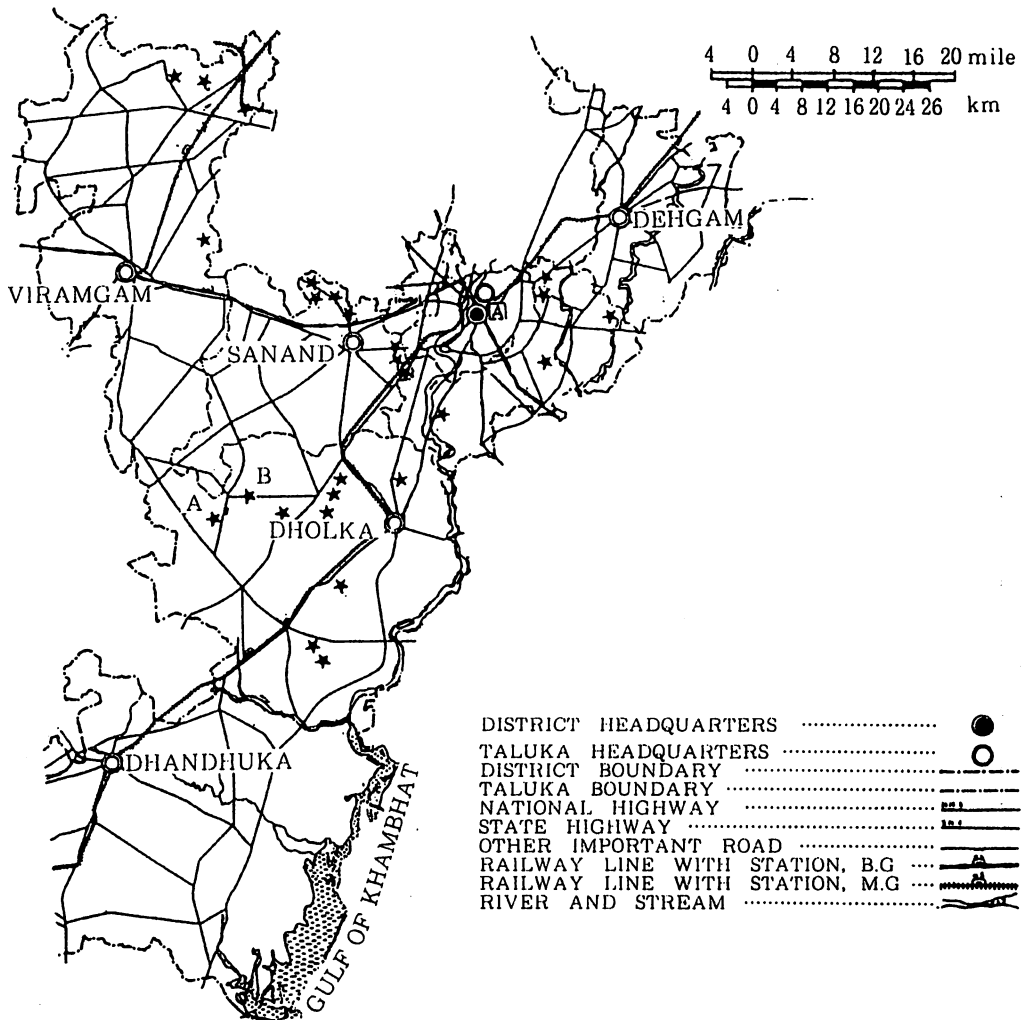
の組合は、未亡人・主婦等により乳牛（主に水牛）飼育から搾乳、ミルクの組合への搬入、組合の脂肪率検査、ミルク代金の受渡し管理その他濃厚飼料販売等に至るまで女性達（特に低位カーストの貧しい女性達）により運営される。ミルク生産を通じて彼女らの経済的上昇が明らかになっている。

セワ事務所でのヒアリングによれば、調査時点で州内には60余りのセワの組織化した女性酪農協同組合があり、そのうちアムダーヴァード県下には30組合があるという。そのうち、センサスで確認できた村の酪農組合は、26組合で、それらを集荷ミルク量の多い順位並べた一覧表が表1であり、26組合の位置を図1に示す。この表から以下

表1 アーメダバード県下の女性酪農協同組合リスト

地区 番号	村名	県名	設立 年次	会員 総数	活動 会員	年間乳 販売量	年間乳 購入額		A'	B'	年間乳 販売額	年間乳 収入額	年間乳 純益額	年間乳 純益額	
							A	B							
B 1	Baldana	Dholka	1979	160	70	151.2	0.9	2.2	907.2	5.7	13.0	1020.6	113.4	14.6	1.2
2	Chiyada	Dholka	1989	120	100	144.1	1.2	1.4	801.8	6.7	8.0	863.7	61.9	8.6	0.7
3	Rupal	Dholka	1986	115	84	94.8	0.8	1.1	570	5.0	6.8	612.7	42.1	7.3	0.7
A 4	Dumali	Dholka	1984	75	30	86.3	1.2	2.9	348.5	4.6	11.6	360.1	11.6	12.0	1.0
5	Kathwada	Daskroi	1987	76	25	81.2	1.1	3.2	393.5	5.2	15.7	419.0	25.6	16.8	1.4
6	Pasunj	Daskroi	1980	136	60	64.4	0.5	1.1	426.1	3.1	7.1	460.3	34.1	7.7	0.6
7	Chekhala	Sanand	1989	77	35	57.1	0.7	1.6	341.9	4.4	9.8	359.0	17.1	10.3	0.9
8	Sanathal	Sanand	1987	50	43	55.0	1.1	1.3	300.2	6.0	7.0	334.0	33.8	7.8	0.6
9	Miroli	Daskroi	1987	120	55	54.1	0.5	1.0	283.9	2.4	5.2	312.9	29.0	5.7	0.5
10	Godhavi	Sanand	1990	65	40	52.7	0.8	1.3	309.1	4.8	7.7	324.7	16.1	8.1	0.7
11	Zenkda	Dholka	1990	31	26	43.1	1.4	1.7	191.6	6.2	7.4	203.4	11.9	7.8	0.7
12	Rupgadha	Dholka	1991	42	28	37.0	0.9	1.3	161.2	3.8	5.8	177.4	16.2	6.3	0.5
13	Bilasiya	Daskroi	1988	100	35	36.9	0.4	1.1	227	2.3	6.5	245.7	18.7	7.0	0.6
14	Vanch	Daskroi	1989	35	15	32.2	0.9	2.1	153.9	4.4	10.3	164.7	10.8	11.0	0.9
15	Rampura	Sanand	1989	30	22	31.8	1.1	1.4	201.7	6.7	9.2	212.8	11.2	9.7	0.8
16	Vejalaka	Dholka	1989	30	22	31.1	1.0	1.4	162.7	5.4	7.4	171.7	9.0	7.8	0.7
17	Navapura	Sanand	1989	50	20	29.3	0.6	1.5	129.2	2.6	6.5	113.3	3.8	6.7	0.6
18	Anadej	Sanand	1990	30	17	28.6	1.0	1.7	144.6	4.8	8.5	146.4	1.8	8.6	0.7
19	Ranesar	Dholka	1988	76	12	24.7	0.3	2.1	86.8	1.1	7.2	91.5	4.7	7.6	0.6
20	Shekhadi	Dholka	1991	31	16	20.8	0.7	1.3	116.6	3.8	7.3	126.5	9.9	7.9	0.7
21	Jakhada	Dholka	1990	35	35	17.5	0.5	0.5	89.1	2.5	2.5	96.3	7.2	2.8	0.5
22	Shobhasan	Virangam	1990	52	60	17.1	0.3	0.3	105.5	2.0	1.8	114.4	8.9	1.9	0.6
23	Malei	Virangam	1990	30	24	16.8	0.6	0.7	90.7	3.0	3.8	818.0	8.9	3.4	0.6
24	Changodar	Sanand	1990	30	18	10.6	0.4	0.6	69.5	2.3	3.9	76.1	6.7	4.2	0.4
25	Jethipura	Virangam	1990	20	20	7.9	0.4	0.4	46.7	2.3	2.3	50.8	4.1	2.7	0.5
26	Odhav	Virangam	1990	22	22	6.2	0.3	0.3	39.7	1.8	1.8	40.8	1.0	1.9	0.6
			(計)	1638	934	1232			6698	4.1	7.2	7916.8	519.4	196.0	18.3
			(平均)	63	36	47.4	0.8	1.3	257.6			304.5	20.0	7.5	0.7

出典：SEWA 1993, pp.46-49. 注) A：会員1人あたり年間生産量，B：活動会員1人あたり年間生産量。



出典：Census of India 1981-Ahmadabad District SEWA 1993, pp.46-49.

図1 アムダーヴァード県下の女性酪農協同組合の分布  
(中里, 1995c より)

のように要約できよう (中里, 1995c)。

### 1) 組合の立地

気温が高いために、ミルクは3～4時間で分解し、品質の低下を招く。一般に、ミルク生産農家は、自ら搾乳して村の酪農組合までミルクを運ぶ。組合では、ミルクの量と品質(主に脂肪率の検査)が検量・検査された後に、他の生産農家のミルクと一緒に40キロ入り牛乳缶に注がれる。そして、アムダーヴァード市内に在るウッタム酪農(Uttam Dairy, 430組合, 4万719組合員, 日量94トン)のミルク運搬トラックを待つ。朝方と夕方

の1日2回、トラックは一定のルートで各酪農組合のミルクを集めて回る。その範囲は、アムダーヴァード市内のウッタム酪農からせいぜい、1時間半程度の距離、つまり約50～60kmに位置するドールカー郡やヴィーラムガム郡までである。

### 2) 設立年次

セワが、農村部の未組織の女性労働者の組織化を始めるのは1975～77年頃からであり、しかもセワがドールカー郡下の15村落の開発計画を決めたのが1980年である。それゆえに1980年代の後半に多くが設立された。これは、セワがインド酪農振

興局の支援を受けて、乳牛飼育とミルク生産を女性の労働運動、協同組合運動および女性運動につなげるための組織的な運動実践であった。

### 3) 組合員規模

26組合の登録組合員の平均は、63人である。そのうち、年間を通じてミルク販売を積極的に行う活動会員は、6割に満たない36人である。恐らく、現実にはさらに少なく、5割を割るものと推察する。一般の酪農協同組合の活動会員は、せいぜい3～4割程度である。この高さは、女性酪農協同組合の組合員の意識の高さを物語るものであろう。

### 4) ミルク集荷量

ドールカー郡のバルダナ組合が、最も多く年間15トンのミルクを集荷し、少ない組合はわずかに年間で6.2トンである。ミルクの集荷量は組合による格差が大きい。活動会員1人当たりでみると、平均で年間1.3トンであるが、ミルク集荷量の多い組合では、1人当たり年間3.2トンにも達している。ミルク集荷量の多い組合ほど、活動組合員のミルク出荷量も多くなる傾向がある。

### 5) 乳購入量・購入額

組合員が組合に持ち込むミルクは、すべて組合は購入しなければならない。ミルクを確実に販売できることは、これまで、現地のミルク仲買人(ドゥーディア, Dudhia)に安くたたかかれていたミルク生産者は極めて重要な意味がある。また乳価は、脂肪率で決まるので、その検査が組合の重要な専門的な作業となっている。この作業には、専門的訓練が必要である。一般に組合は組合長、事務係、検査係、助手などを抱えるが、規模の小さな組合では、事務係が検査を兼ねる場合が多い。

表1の通り、最大のバルダナ組合(年間151.2トン、90万7,200ルピー)、チャダス(Chiyadas)、ルパール(Rupal)と続くが、いずれもドルカ郡の組合である。このバルダナ組合でも、1日当たりで計算すると、414リットルであり、これはラージャスターンのジャイプル県下の酪農協同組合の実績と比較すると確かに多いが、同じグジャラート州のメサナ県下の小生の調査村であるバププラ(Bapupura)村<sup>7)</sup>に較べると低い。一方、購入額の少ない組合には、オダーブ(Odhav)組合(年間3万9,700ルピー)をはじめとしてヴィーラムガム郡下の組合が多く並ぶ。組合平均では、常雇いに事務係等の人件費を引いた残りの年間純益は、7,500ルピーとあるが、さらに組合では組合員への

還元金としてボーナスの配給もある。

### 6) 乳販売額

ミルクの販売先はアムダーヴァード市内にある県生産者組合連合の経営するウットム・デイリーである。各組合は、ウットム・デイリー差し向けの1日2回のトラック合わせて生産者からのミルクを検量・検査する。

26組合の活動組合員1人当たり平均販売額は、年間7,200ルピーとなる。これは、搾乳経営の利益率が一般に50%と見なされることから活動会員のミルク生産の年間純収入を計算すると約3,600ルピーとなる。これは、農業労働者の年間収入額に近い額である。小生の調査村落の一つであるバププラ村では、ミルク生産で得た収入が新築、台所・便所の改築さらに学費に向けられる。この村の女性の家庭内での地位は確実に高いのである。

## 三) ドゥーマリ女性酪農協同組合の実態

### 一) 村の概況

#### 1) 村の位置

ドールカー郡ドゥーマリ村は、アムダーヴァード県の行政区域に入るが、その地理的位置には恵まれていない。つまり、アムダーヴァード市(1991.人口、2,954,526人)から南南西方向に走りドールカー町(1991.人口、54,352人)に、そこから方向を北西に走りバウラー(Bavla, 1991.人口、25,391人)に着き、さらに方向を西南西に走り到着する。すべて道路は舗装されているが、道幅は一部狭く車一台がやっとである。とにかく、アムダーヴァードから順調に走れてジープで約2時間余りである。村内の道路は、細砂で覆われ歩きにくい。集落に入ると高木に囲まれた広場があり、その一角を小学校と村役場が占める。またそこには、共同の深井戸がある。役場のそばを通り抜けると民家が密集するが、その中心には小さな店が5～6軒あり、日用雑貨を販売している。そしてその西隣にみずばらしい一棟の民家が広場の中にポツンとあり、それが酪農協同組合の事務所である(図2)。

#### 2) 村の耕地と人口・就業

ドールカー(Dholka)郡ドゥーマリ(Dumali)村は、表2の通り、村の面積は、2482.8ヘクタールと郡内では比較的大きな村であるが、その内訳は作付け耕地や灌耕地澆面積では僅かに郡平均を下回っているが、調査村の特徴は非農地面積の広さにある。この非農地面積が格段に広いのは、村

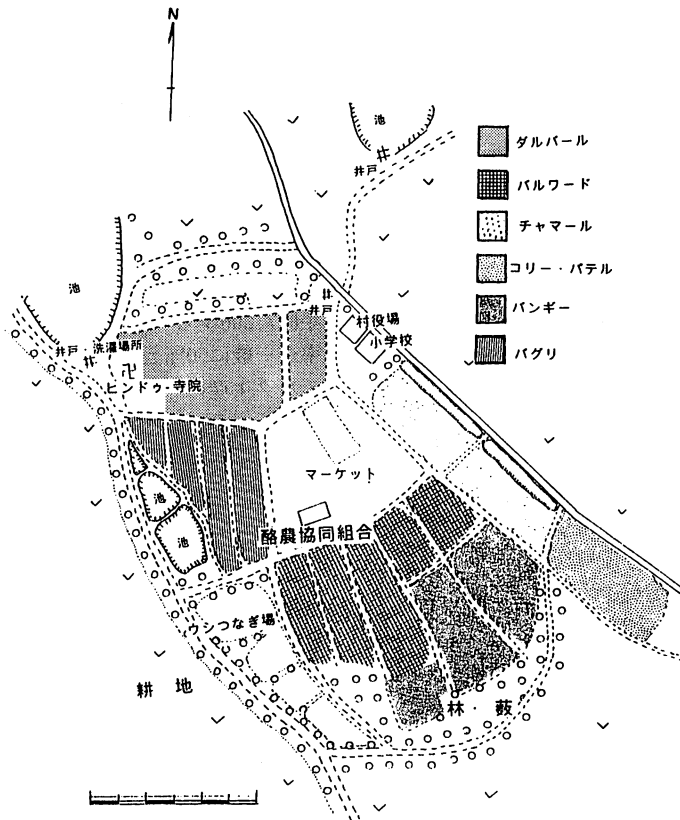


図2 ドゥーマリ村集落概図  
(中里作成)

表2 ドールカー郡(村平均)とドゥーマリ村の土地利用状況(1991年)

	村域面積 (ha)	耕地	灌漑地	灌漑率 (%)	放牧地等	非農地
郡平均	1509.4	1114.5	207.3	18.6	170.9	223.9
ドゥーマリ	2482.8	1032.9	165.6	16.0	172.5	1277.4

(District Census Handbook Ahmadabadによる)

表3 ドールカー郡(村平均)とドゥーマリ村の世帯・人口数及び就業状況(1991年)

	世帯	人口	SC	ST	識字者	識字率 (%)	就業 者数	農業	農労	牧畜	その他
郡平均	368	1962	314	57	908	46.3	780	202	436	22	120
ドゥーマリ	182	935	149	0	309	33.1	366	85	209	65	10

(District Census Handbook Ahmadabadによる)

域にある数カ所のため池の面積によるものである。この非農地や放牧地(ゴーチャール, Gauchar)が比較的広いことが、表3で示されるように

ドゥーマリ村の牧畜就業者の多さに関連している。ついで、世帯数(182戸)や人口数(935人)はいずれも郡平均を大きく下回る。指定トライブ



(Scheduled Tribe, 以下STとする)は、センサスではないときされているが、村にはバグリ(Vagri, 伝統職は石工)とコリー・パテル(koli・Patel, 伝統職は農業)の指定ドライブが居住している(図2参照)。この理由については不明である。指定カースト(Scheduled Caste, 以下SCとする)の割合は、平均的である。村では、チャマル(Chamar, 伝統職、皮革・農業労働)、バンギー(Bhangi, 伝統職は清掃)が指定カーストである。識字率の低さと牧畜就業者の多さが、この村の特徴である。

### 3) 農耕民と牧畜民・出稼ぎ者

センサス調査によると、村を構成する世帯は182戸となるが、村人からの聞き取りでは、せいぜい100世帯である。この村人の答えた世帯数は、概ね屋敷の数を示しているのであり、この数値が村の社会経済状況を考えるときには実質的な数値である。表3は、ジャーティ別の世帯数を示したものである。

村のドミナントカーストであるダルバル(Darbar, 伝統職、地主)の世帯16戸のみが、日常的に農業を生業とし、他の五つの主なジャーティはいずれも家畜飼育か出稼ぎ、さもなければダルバルに農業労働者として雇われ仕事に従事している。1957年の土地改革では、総面積で244.8ヘクタールの土地がバルワード・コミュニティともう一つのチャマルやバンギーのグループに配分された。その内訳は、前者には、16世帯に一括して102.4ヘクタール、後者には23世帯に対して142.4ヘクタールの土地である。しかしながら、不思議なことに配分された村人には、土地の所有意識が薄く、ヒアリングでは、「あの土地はコミュニティとしての土地で自分の土地は解らない」とか「せいぜいスイカしか作れない痩せた土地で誰も耕作しない」と、ほとんど彼らの土地に関心を示さない。しかし、後述するように、特にチャマル世帯は自らの土地として耕作する例もみられる。その詳細を知り得るデータは得ていない。

調査期間中にパトワリ(Patwari, 地稅調査役人)に会うことが出来なかつたので、図面上での確認は出来ていない。恐らく土地は分割され、所有者の名前も記載されているのではと推察するが、彼らの理解では彼らのコミュニティの所有する土地という。そして、既述の通り、彼らは異口同音に「作付けしない。農業はしていない」と答える。

## 二) 牧畜業と酪農協同組合

### 1) 伝統的な移動牧畜民バルワード

バルワードはグジャラート州の羊飼いにコミュニティである。その語は、グジャラティー語のBadawadが変形してBharwadとなったもので、Badaは羊を、Wadaは囲いを意味する言葉である。つまり、羊のいる囲いを有する牧人・コミュニティと言うことである。(Singh. K. S., 1994. pp. 112-115.) 彼らの多くはグジャラート州、カチャワール半島の地に定着する。今日、バルワードの飼育する家畜は多様で、羊の他に山羊、牛や水牛を引き連れて、乾季には遠く南グジャラート付近の灌漑農村に乾季の始まりとともに移動する。その移動先の村での仮住まい期間は、ながくは半年以上になることもしばしばで、家畜の飼育だけでなく、家畜の販売や農業労働などの賃稼ぎを行うのである。そして、雨季の始まる頃に村に帰り、一部農業を行うとされる。州内の農業先進地であるケーダー県下の一農村、アンバブ(Ambav)村の調査では、1987年の大干ばつの際に、彼らは村に帰ることをやめてしまい、仮住まいの地に定住してしまい、アンバブ村の村人との対立を生じている(中里, 1995b, 577頁)。このような移動牧畜民の移動先での定着化の例は、州内至るところでみられ、近年では特にインド西部の乾燥・半乾燥地域において移動牧畜は盛んになっている(中里, 1998)。

雨季に彼らの帰村するドゥーマリ村には、比較的広い放牧地や茂みがあり、それらが村人の放牧地となる。村の放牧地は、ドゥニヤ(Dhuniya, 45.2 ha)とカナイヤ・タラブ(Kanaiya Talav, 20.0 ha)の二カ所に分かれるが、いずれも、調査時点での草生状況は雨季でもあり良好であった。しかしながら、これらの放牧地には牛や水牛の姿を見ることが少なかった。

表4は、コミュニティ別の家畜飼育状況を示す。この村のバルワード・コミュニティは、羊や山羊などの小家畜はほとんど飼育せず、大家畜の牛(コブ牛)と水牛のみである。牛はカンクレイジー種(Kankrej Breed)やギール種(Gir Breed)でいずれも、役用と乳用にも優れた牛である。村民の所有するウシは、約500頭前後であるが、この時期には他地域に住む同じバルワード・コミュニティの親戚などからの預かりウシが100頭余りいるので、親ウシのみで総頭数は600~700頭となる。

### 2) 女性酪農協同組合の成立経緯

ドゥーマリ村の女性酪農協同組合の成立経緯に

表4 1992年ドゥーマリ酪農協同組合・組合員名簿

Jati	登録組合員	活動組合員
Bharwad	30	17
Vaghri	20	10
Chamar	16	4
Bhangi	8	2
Darbar	7	3
Koli Patel	3	2
不明・その他	5	8
合計	89	46

(ドゥーマリ酪農協同組合資料)

関しては、既述したように、Marty Chen and Anila Dholakia (1986) のレポートで詳述され、それを拙稿 (1995) で紹介している。ここでは、組合設立のショート・ストーリーを以下に記す。

セワの組織的な活動は既述の通り三段階に分かれるが、ドゥーマリ女性酪農協同組合は、第三段階の時期に設立されたのである。

ドゥーマリ村は、大地主であるダルバルの支配する村である。その他には、バルワードがいる。彼らは、伝統的には羊飼いであり、彼らはこの地域の個人ミルク商人で、強力な政治的裏面工作、特に個人及び州の酪農に関する政治力を持っている。そして、バルワードの女性は、ダルバル女性のような厳格なパルダ (Purdah) 制<sup>8)</sup>はない。この二つのジャティー・コミュニティが村の富と権力を握っている。もう一方の極に、コリー・パテルと指定トライブのバグリ、さらに指定カーストのバンギーとチャマルがいる。彼らの多くは、農業労働者でダルバルやバルワードに借金をしている。そして農業やその他の雇用の機会はすべてダルバルに依存するのである。この村のダルバルは、二つのグループに分かれ、それらはミルク販売のルートを異にしていた。

セワは1979年に始めてドゥーマリ村に入った。既述した通り NDDDB と提携したサバルマティ・アシュラム・ゴウシャラ・プロジェクトによる人捜しで、結果的に22名の女性をアムダーヴァード市内の畜産局での5日間研修コースに送った。しかし、ドゥーマリ村が、距離的に遠いということと始めて家畜を飼育する女性が数人いたことから国立銀行は約束していたローンの貸し出しを渋った。それでセワは、遠隔地のドゥーマリ村で仕事を増やし、協同組合の登録を進め、同時に託児所と識字学級をスタートさせた。1982年の暮れに銀

行が22人に対して各々2000ルピー相当のローンを貸し付けた。そして、IRDP (Integrated Rural Development Project) から33%の補助金を得て、彼女らは平均的な水牛1頭を手にした。ハリジャン居住区にあるバルベン (Balu-behn) の自宅を開放して、託児所にし、識字学級を開き、同時に彼女の家にミルクを持ち運んだ。セワは、サルダール酪農のトラックの来るデブドレラまでダルバルと交渉してロバの荷車で運んだ。しかし、1983年の始めにダルバルの多数派の党首が、協同組合の活動に違法行為などの妨害を加えたので、その年の暮れに、ドゥーマリ村に住む1人未亡人を組合員にして、彼女に酪農協同組合を公式に監督させ、銀行やサルダール酪農にも通知した。しかし、彼女もまたダルバルなどにより妨害され、組合員にも迷いが生じた。1984年の始めにセワは自らの組織の者、7名の女性を指名して、酪農と協同組合管理についての1ヵ月間の研修をさせ、そのうちの1名をドゥーマリ担当とし村に送ったが、モンスーン降雨のためにミルクの運搬がままならない状況で、結局は地域のミルク仲買人に売らざるを得なくなった。それで、セワはサルダール酪農に対してドゥーマリ村までのトラックの乗り入れを要求したが、ダルバルの巧妙な裏面工作により上手く行かず、セワは地域のミルク仲買人に依存する状態が続いた。そして、結局は1985年4月15日にサルダール酪農とセワは、登録協同組合からのみミルクを購入すると言う解決策を得て、デブドレラまでのミルク運搬の為にロバ荷車を購入した。そして、ダルバルの少数派の党首の個人屋敷を借り、そこを酪農協同組合事務所と、今日に至っている。

### 三) 農家経済と酪農業—サンプル調査から

本村は、ダルバルの村である。彼らは、土地改革の際に、村の土地の一部をその他のコミュニティに割譲したが、依然として村の耕地面積の76.3%を所有している。表5は、サンプル調査農家の経営状況一覧である。これら21世帯は、主に年間収入額により、大きく上位階層、中位階層そして下位階層にわけられる。それぞれの階層の特徴を述べる。

#### 1) 上位階層

すべてダルバル・コミュニティの農家であり、主に灌漑耕地を所有する。年間収入はいずれも2.3万ルピーを越える。収入の90%以上が耕種部門からのもので、畜産はせいぜい1~2%程度に留まる。彼らの主な現金収入は綿花の生産・販売

表5 サンプル調査農家一覧表

世帯番号	ジャーテイ	世帯人数	世帯主年齢	土地所有状況(ヒガール)			家畜(ウシ)飼育頭数			その他	耕種販売益(Rs)	畜産ミルク(Rs)	賃労働その他(Rs)	年間世帯収入額(Rs)	ミルク収入割合(%)	賃労働収入割合(%)	
				灌漑地	非灌漑地	計	牝牛	牝牛	水牛								合計
1	Darbar	6	40	80	32	112	6	4	8	18	0	153000	2300	0	155300	1.5	0.0
2	Darbar	5	60	25	15	40	4	1	2	7	0	25300	0	1400	26700	0.0	5.2
3	Darbar	5	50	25	0	25	0	2	0	2	0	22850	450	0	23300	1.9	0.0
8	Bharwad	8	46	20	0	20	2	10	3	15	0	6000	13000	4200	23200	56.0	0.0
4	Bhangi	15	50	0	0	0	2	0	4	6	2	0	4200	18800	23000	18.3	81.7
5	Bharwad	9	35	0	0	0	2	7	2	11	0	0	6200	16000	22200	27.9	72.1
6	Bharwad	7	35	5	0	5	0	7	0	7	0	0	21000	0	21000	100.0	0.0
7	Bharwad	5	45	0	0	0	0	10	0	10	0	0	8500	9700	18200	46.7	53.3
9	Bharwad	8	80	2	0	0	1	9	3	13	0	450	10400	4200	15050	69.1	27.9
10	Bharwad	6	80	0	0	0	0	2	10	11	0	0	9200	5000	14200	64.8	35.2
11	Koil Patel	10	60	0	0	0	1	2	0	2	0	0	1900	12000	13900	13.7	86.3
12	Vaghri	8	40	0	0	0	0	0	1	1	0	0	4000	8400	12400	32.3	67.7
13	Bharwad	4	45	0	0	0	4	24	0	10	0	0	7200	4000	11200	64.3	35.7
14	Chamar	6	60	2	0	2	0	0	3	3	0	2000	700	6000	8700	8.0	69.0
15	Chamar	8	82	0	2	2	2	0	2	4	0	3000	4500	1200	8700	51.7	13.8
16	Bharwad	5	42	0	0	0	0	4	2	6	0	0	300	7450	7750	3.9	96.1
17	Bharwad	2	40	2	0	0	0	2	0	2	14	0	7000	0	7000	100.0	0.0
19	Bharwad	2	25	0	2	2	0	1	0	1	0	0	2500	4000	6500	38.5	61.5
18	Bharwad	2	23	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1350	3600	4950	27.3	72.7
20	Vaghri	9	40	0	0	0	0	0	4	4	0	0	250	3600	3910	6.4	92.1
21	Bhangi	2	90	0	1	1	0	1	2	3	0	700	650	100	1450	44.8	6.9

(1995年、現地調査による)

で、耕種部門の総販売額に対する綿花販売額の占める割合は、農家番号1と農家番号2とが共に高く86%を占めている。これに対して農家番号3は30%である。

農家番号1の経営状況の概要を以下に述べよう。

5人兄弟の長男(40歳)は、30数年前に立てられた豪壮な居宅に夫婦で住んでいる。両親は次男、三男など子供達や孫と郡内第二のヴェーラーバー町で生活している。この長男夫婦の子供4人は(男1人、女3人)はいずれも、次男、三男家族と共に生活し、学校などに通っている。ちなみに、ダルバル・コミュニティ出身の学齢期の子供達はすべて、村外の町の学校に就学している。

つまり、この長男夫婦は、彼らだけで実質的に両親や兄弟の持ち分の農地の管理・経営を行っている。表1は、五つに等分したものを掲げたが、ここではかれら夫婦の経営状況を述べてみたい。

#### a) 耕種部門

##### 1) 農地所有と作付け状況

灌漑耕地が400ビガー、非灌漑耕地が160ビガーの合計560ビガーを所有する。顕著な特徴は、村の灌漑耕地の5割近くをこの家族が所有していることである。そして、もう一つは、大半の農地を直接経営していることである。つまり、分割することなく、しかも一部刈分(Share-cropping)小作に出すが、政府ローンで購入したトラクターと豊富で安価な農業労働を利用しての経営である。

この広大な耕地による経営の中心は、作付面積250ビガーの綿花栽培である。その他には、いずれも50ビガー程度の面積に、小麦、バジェラ、ジョワール、米そして豆類の作付けである。基本的には1年1作の形態を保持している。

##### 2) 作物販売状況

綿花の生産量は、ビガー当たり15マウンド(1mound=20kg)平均で750トンの生産がある。綿花は全て販売される。販売価格は変化するが、現状では、kg当たり10ルピーとされ、総販売額は75万ルピーである。ついで、小麦、バジェラとジョワールの雑穀は共に25トン程度の生産量で、小麦は90%の販売を行うが、バジェラ、ジョワールの雑穀は自家消費、家畜やその他に回し、販売はない。米については、平年作では、ビガー600kg程度であるが、昨年度は生産総量でわずかに600kgに過ぎず、販売に回せたのは100kgで、その販売額は僅か350ルピーという。平年作であれば、米の販売額は、10.5万ルピー程度にはなるのである。その他には、3~4種の豆栽培を行い、それらの販売額は

48,600ルピー程度である。

以上耕種部門の総販売額は、870,350ルピーと計算される。

#### 3) 生産費の内訳概要

生産費総額は、約105,500ルピーとなる。その内訳は、農業労働者への支払賃金が、全体の28.4%を占める。ついで、農薬類が23.7%、ついで家畜飼料が17.1%、化学肥料と厩肥の購入が共に9.5%を占める。その他には、綿花の種や小麦のハイブリッドの購入やディーゼル油の購入が年間5,000ルピー程度とされている他は、土地税(長男の支払い分)の年間500ルピーの支払いがある。その他には、政府ローンによるトラクターの年間支払い分がある。

#### 4) 年間の収益

かなりラフな計算になるが、販売額から生産費を差し引いた、380,500ルピーが耕種部門の収益ということである。さらに、管理・経営の全部を任されている長男夫婦の取り分と次男以下の取り分には違いがある。長男からのヒアリングによれば、「年間50万ルピーが取り分」という発言は、基本的に兄弟で均分するということを示唆している。

#### b) 畜産部門

ついで家畜飼育については、役用ブロックを3組(6頭)、乳牛が4頭、水牛7頭(うち牝水牛が4頭)の合計17頭である。15年前に建てられた畜舎での舎飼中心である。ミルク生産量は、4頭の搾乳中の水牛で7トン程度、1頭の乳牛で0.8トン程度である。そのうち、販売に回すのは30%を下回る。つまり、7割近くは飲用の他にギーの製造など自家消費される。ミルクの年間販売は、5,000ルピー程度と推計されるが、事務所の販売実績データによると、その半分の2,300ルピー程度となっている。問題は、家畜飼料代を耕種部門の生産費に計上した点にある。その理由は、彼ら夫婦の感覚が、依然として耕種生産つまり役用ブロック(2頭1組の牝牛)への期待が大きき、搾乳用水牛の飼育は、自家用ミルクの生産という感覚が強いことによる判断である。そして、ギー等の生産物はまた兄弟に分け与えられている。

以上上位グループの例に、ダルバル・コミュニティ最大の勢力を誇る農家1の例を紹介した。基本的に、ダルバル世帯は、耕種部門に力点を置き、畜産・ミルク生産に対する関心は薄く、それは酪農協同組合活動への消極的な参加態度となる。本村のダルバル・コミュニティは一般的には、兄弟1人を村に残し、残りの兄弟は村外に出る傾向が強く、この考えがほぼ常識となって

いる。その行き先は、ラジコット (Rajkot) アムダーヴァード、バプナガル (Bhavnagar), バローダ (Baroda) 等、職業は政府職員、エンジニア、鉄道員、警察官などの恒常的な仕事に従事している。

## 2) 中位グループ

このグループには、農家番号4～13の農家である。バルワード世帯が7戸、残りは、バンギー、バグリーそしてコリー・パテル各1世帯の計10世帯である。いずれも年収が、1万ルピーを越え、農地所有世帯が3世帯あるが、これらはいずれもバルワード世帯で、前述した通り、コミュニティとして所有する農地を個人分をヒアリングで述べた世帯である。しかし、実質的には表に示すように、耕種部門での販売は皆無である。

このグループは、一つは畜産・ミルク生産に依存する5世帯と、もう一つが農業労働を始めとする賃労働による収入に依存する5世帯とに二分される。

### a) 畜産・ミルクを主な収入源とするグループ

5世帯はすべてバルワード・コミュニティで、畜産・ミルク生産が年間収入の過半を占める世帯である。畜産・ミルク生産からの収入の多い世帯番号6は、全酪農協同組合員の中で最大のミルク販売額の実績を誇る。世帯主(35歳)は5ピガールの農地にジョワールを自家食用と飼料用に栽培し、7頭の搾乳牛(内5頭が搾乳中)を妻(30歳)と世話をし、年間出荷量は1万リットル余りで、販売代金38,190ルピーとボーナス1,241ルピーを得ている。次の世帯番号9は、コミュニティ共有地のうちシェア分の2ピガールの農地を一組のバロックで耕起し、灌漑水を購入することで、小麦栽培を行う。自家食糧用と一部販売する。世帯主は高齢(80歳)であるが、次男家族に長男家族2人(本人と娘)が同居し、総勢8人である。ミルクの売上額は、村では第2位で年間収益は1.0万ルピー程度である。世帯収入は1.5万ルピー程度となる。世帯番号8は、20ピガールを所有し、土地税175ルピーを支払う。小麦栽培をトラクターの借用と農業労働者の一部雇い入れにより行う。耕種部門での収益は1.0万ルピー程度であり、ミルク収入の他に成牛販売があり、年間1.3万ルピー程度であ、総計で2.3万ルピー余りであり、このグループでは、最高の収入を得ている。この世帯がどのようにして農地を入手したか情報を得ていない。

世帯番号10と同じく13は、年間総収入の6割余りを畜産・ミルク収入が占める点で共通している。前者は、高齢の夫婦(80歳)、後者は未婚の娘2人

ということから、ミルク生産にしても、また雇用農業労働を増やすにしても限界がある。

以上5世帯は、ともにバルワード・コミュニティに属し、10頭前後のウシを飼育し、ミルク販売の他にも、バロック用の育成牛や親戚などからウシの預かり料などの収入があるが、個々では主にミルク販売実績のデータをもとにしたの、実質的な年間収入は2～3割方多くなるのではと推察する。いずれにしても、全てのバルワード世帯では、10年前に較べてウシ頭数が、大幅に減少して、ミルクと賃労働に傾斜したことは、ヒアリングの中で明らかになったことである。いずれにしても、上位グループのダルバル世帯は、生活場所を他の都会に移している現状では、この中位グループの世帯がドゥーマリ村の経済社会を実質的に担うことになろう。

### b) 賃労働・出稼ぎを主な収入源とするグループ

5世帯のうち、2世帯はバルワードでウシ飼育頭数も10頭を越える。農家番号6の世帯では、夫婦は家畜飼育と一部賃労働に出るが、息子2人(1人は短大卒)と娘1人は農協同組合の組合長を務める。搾乳用は全て牛で水牛の飼育がない。その為、年間のミルク売り上げ実績は15,836ルピーにとどまり、ミルク販売実績のある47世帯中の上から6位である。又農家番号6は、コミュニティに配分された農地の16分の1のシェアを有するが、現実には何ら作付けしていない。しかし、豊富な労働力を利用して、ダルバル世帯の農地5ピガールを刈分小作をおこなっている。そして、一組の飼育するバロックを利用しての農業労働を提供してきたが、昨年度の実績ではわずか5日間(牛、鋤と男1人:1日100ルピー)のみであった。年間2.2万ルピー余りの収入は、身体一つでの農業労働に雇用されて得たものである。

ついで、このグループで最も年間総収入の多い農家番号4は、指定カーストのバンギー世帯である。世帯主夫婦には、既婚の2人の息子とその家族及び未婚の2人の息子と同居している関係で、世帯人数は15名を数える。息子4人のうち、長男は年間で雇用(年間7,200ルピー)されているが、他は日々雇われている。いずれも村内のダルバル農家の農業労働に従事している。一組のバロックを連れての農作業を行う次男は、年間4,800ルピーを得るが、他の2人は2,000ルピー余りである。ミルク生産についてみると、この世帯の母親は、現在はドゥーマリ酪農協同組合の幹部委員を務めている。搾乳用の水牛を4頭飼育し、年間の

ミルク売り上げ代金(1993~94年)は7,868ルピーで、その他にボーナスとして255ルピーを得ている。ミルク生産による収入は飼料代などを引くと年間4,200ルピー程度と推察される。この世帯は、年間2.3万ルピーを得ている。その内訳は農業労働による収入が8割余り、酪農収入が2割足らずの年間2.3万ルピーを得ている。ちなみに、この村の現在の農業労働の賃金体系には二つのタイプがある。一つは、午前7時から午後1時までの5~6時間働く場合ともう一つは午前8時から午後6時までの8~9時間働く場合があり、前者の賃金は12~15ルピー、後者の場合には20ルピーであり、これらがこの村の相場である。例えば、この村の雇用農業労働者の年間労働日数の平均である240日働くとして、年間の収入は約3,600ルピー程度である。

その他の世帯番号11のコリー・パテールの世帯と同12のバグリー世帯では、共に村内での農業労働に依る収入である。前者では2~3人、後者の場合には両親の他には、長男は働かず、次男(15歳)三男(10歳)はまだ若い、昨年は他村で臨時的な収入を得た。両親と息子4人と娘2人の8人家族で、年間収入はミルクの収入を入れて1.2万ルピー余りで楽ではない。現状では農業労働からの収入を増やす方法が最良の道と考えている。

以上これら5世帯は、ダルバル農家の農業経営に深く関わり、そこで得た日銭が主な収入源である。問題は、ダルバル農家の経営が機械化による粗放的な方向を選択し、集約化の方向を意図していないことである。つまり、農業用水が不安定なこの村での、農業には、既述の通り兄弟1人を残し、他の兄弟は都市・町で就学し卒業後も村には帰らず都会で就労する現実である。村内の農業労働需要に依存した雇用は、現実にはブロックを連れての農業労働は、現実にはトラクターに代替されつつあり、彼らが雇われる日数も減じている。

### 3) 下位グループ

下位グループは、番号14~21の8世帯である。このうち4世帯がバルワードである。この中で例外的な番号16は、表5でのミルク収入はわずか300ルピーとしているが、ヒアリングでは年間6,000ルピー程度が一の収入があるという。世帯主(42歳)の他に、妻(40歳)、長女(18歳)と長男(15歳)とが農業労働には出るが、年間収入は7,000ルピー余りである。この世帯での10年前のウシ飼育頭数は、30~35頭程度だった。ミルク収入と賃労働収入とに依存する傾向がこの10年間で進行したと言う。他の3世帯は、いずれも夫婦2人の世帯で、

ウシ飼育頭数も1~2頭にしかすぎない。番号18と同19は共に20歳代の若夫婦である。現状では、ミルク売り上げ収入が、年間収入の増大と関係している。

その他チャマール2世帯は、共に2ビガーと農地を耕し、同時に搾乳用水牛を飼育しミルクを販売しながら、余剰労働を農業労働に回すことで、つまり収入源を多様化することで世帯収入を上げている。番号9は、2ビガーを綿花栽培にあて、総生産量240kgを収穫し、1kg当たり10ルピーとして計算し、総生産額2,400ルピーを得るが生産費が化学肥料、農薬と種などを引くと約2,000ルピー程度の収入となる。今年度は搾乳用として1頭の水牛を購入して、現在は2頭飼育している。しかし、2人の息子はいずれも臨時雇いの運転手で、1ヵ月2,000~3,000ルピーとなる。番号14は、一組のパロックを飼育して、2ビガーの農地に米と綿花を各1ビガー栽培する。これらからの収入は約3,000ルピーである。ミルクの売り上げ実績は少ないが、調査時点での収益は搾乳中の水牛が2頭(昨年度、水牛1頭を政府ローン4,500ルピーで購入)となったことから約3,000ルピー程度の年収があるという。現在は、世帯主(80歳)は三男家族と生活するが、長男(警察官)と次男(工場労働者)が移り住んでいるアムダーヴァードでの生活がこの世帯の支えである。バグリー世帯は、綿花(3,000ルピー)と小麦(200kg、自家消費)栽培の分益小作を行いながら、農閑期には賃労働で稼ぎ、また子供7人(男2人、5人)による賃労働収入は上の娘2人によるものである。番号21のバンギー世帯の夫婦は共に高齢で、ほとんど収入は無いが、アムダーヴァードに住む2人の息子のうち、長男からの送金が年間600ルピーある。村にいる既婚の娘が日常の世話はみる。1ビガーの農地は、米を植え、主に自家消費するが残りは販売するという。ミルクの売り上げはない。

以上、このグループは、世帯人数が少なく、また若年齢の子供、そして未婚女性が多いことなどが、結果として世帯の年間収入の低さにつながっている。また、バルワード以外のコミュニティーの場合には、近年搾乳用の水牛が政府のローンで導入されている例が2例みられ、これら世帯のミルク収入が今後期待される。

## 四) 女性酪農組合と女性労働

### 1) 組合員の人数・ジャティ構成

1993~94年の組合員登録者数は89名であるが、

そのうち、活動組合員は表6の通り46名であった。ジャティー構成は、バルワードが30名、バグリが20名そしてチャマルが16名と続く。登録組合員と活動組合員との関係では、チャマルやバンギーなどの指定カーストで低くなる傾向がある。牧畜カーストのバルワードを除くと、指定カーストやバグリも含め、本来的に搾乳業への関心は薄く、近年の傾向でも村内だけでなくアムダー

ヴァードなど都市部への出稼ぎ世帯が多くなっている。

ついで酪農組合の歴代の組合長やセクレタリーについてみよう。初代の組合長(1984~86)はチャマル、二代目(1986~89)、三代目(1989~92)そして現在の四代目ナニベン(Naniben Rajabhai Bharwad, 1992~95)はいずれもバルワード・コミュニティから輩出している。ついで、組合活

表6 サンプル調査対象の女性組合員の状況一覧

世帯番号	ジャティー	組合員年齢	世帯人数	加入年次	搾乳中		教育識字	就労		収入源 (Rs)			1日の労働時間		ウシ飼育頭数	
					牛	水牛		主職	副業	ミルク	労賃	養	牛	水牛		
1	Bharwad	24	2	93	1	0	0	1	3	7200	900	100	3-4時間	1	0	
2	Bharwad	30	7	85	2	0	0	2	3-1	12000	0	1500	N.A	12	0	
3	Bhangi	45	15	83	0	2	0	3	3-1	9000	0	1000	1-2時間	3	4	
4	Bharwad	25	8	85	7	2	0	1-2	3	21000	0	18000	3時間	20	3	
5	Bharwad	40	5	85	1	0	0	1-2	3	2880	200	400	2.5-3時間	10	0	
6	Bharwad	40	5	85	3	0	0	2-1	3	12000	450	2000	3-4時間	4	2	
7	Bharwad	38	2	85	1	0	0	1	1	N.A	0	N.A	1-2時間	3	0	
8	Bhangi	80	2*	83	0	1	0	2	1-3	N.A	N.A	N.A	N.A	2	1	
9	Chamar	55	6	83	0	1	0	3	1-2	2625	900	100	2時間	2	1	
10	Bharwad	43	4	88	4	0	0	1	2-3	N.A	N.A	N.A	N.A	20	0	
11	Bharwad	46	8	85	2	0	0	2	1	900	N.A	N.A	2時間	12	3	
12	Bharwad	30	6	85	1	4	0	1	2-3	12000	600	N.A	2時間	2	10	
13	Bharwad	20	2	93	1	0	0	3	1-2	7200	900	100	2-3時間	1	0	
14	Chamar	80	8	85	0	2	0	4	0	4500	0	0	2-3時間	2	2	
15	Bharwad	48	9	91	1	2	0	1	2	2100	0	0	2-3時間	4	3	
16	Darbar	38	6	85	1	4	p	1	0	11520	0	0	0	10	8	
17	Vaghri	38	9	90	0	1	0	3	1-2	3400	1800	200	2時間	1	2	
18	Darbar	58	5	85	2	0	p	1	2-3	8000	0	0	2時間	6	2	
19	koil Patel	60	10	90	1	0	0	3	1-2	1440	1800	0	2時間	3	0	
20	Vaghri	35	7	85	0	1	0	1	3-2	4500	0	0	2時間	0	1	
21	Darbar	45	5	85	2	0	p	1	0	2880	0	0	1-2時間	2	0	

(1995年、現地調査による)

注) N.Aは解答なし

動の中核を担うセクレタリーは、初代のウシャベン (Ushaben Kistibhai Bhatt, 1984~92) はブラーマンで、現在の二代目がカイラシュベン (Kailashben Kusubhai Baghela, 1992~95) はダルバル・コミュニティである。いずれにしても、このセクレタリーはその仕事上、識字者でなければつとまらないことから、現状では高いカーストにより担われる傾向が一般的である。

次に運営委員会の構成をみると、組合長・委員長はバルワード (40歳) の他は、バグリが3名、バルワード2名そしてダルバル、バンギーとサドゥ (Sadhu) の9名で構成される。

## 2) 組合のミルク購入量・支払金額

1993-94年の年間購入実績<sup>7)</sup>では、46名の組合員から約86万リットル (ただし1名の組合員の乳量の記載が無いので除外) で、ミルクの支払金額合計は34.92万ルピーとなり、さらにボーナスを1万ルピー余りを組合員の販売額に応じて支払っている。

乾燥サバナ気候下にあるドゥーマリ村は、移動牧畜民のバルワードにより酪農組合は担われているので、彼らの動勢がミルクの購入量を規定する。つまり、図3の通りミルク購入量・支払金額の旬別変化を4月下旬から10月上旬までのデータでみると、バルワード世帯の多くが乾季には灌漑地帯にウシと共に移動し、モンスーンの開始と共に村に帰るというリズムを的確に表している。つまり、10月下旬・11月初旬までには村を離れ、7月中旬までには帰村するという移動牧畜民・バルワードの生活のリズムを物語る。

乳価は脂肪率で決まる。牧畜民のバルワードは、カーンクレージ種の飼育によるバロック販売とその牝牛から搾乳したミルクを一部販売する伝統的

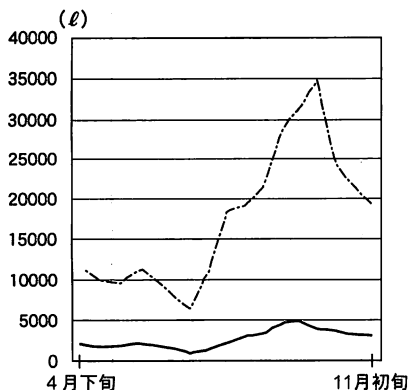


図3 旬別ミルク購入量

(資料: ドゥーマリ酪農協同組合資料より)

な牧畜経済を残しながらも、近年では乳量が多くしかも脂肪率の高い水牛飼育によるミルク販売への転換が一部進展している。ちなみに、県下のデータでみると、1956年当時のウシ飼育での水牛飼育率は40%程度であったが、1987年には53%程度にまで上昇している。ちなみに、調査時 (1995. 8.10) の夕方の購入量は、39リットルのうち、水牛のミルクが16リットル (41.0%) を占めている。

## 3) サンプル調査対象組合員の諸特徴

ジャティー別サンプル調査世帯は、バルワード11世帯、ダルバル3世帯、バグリ、バンギー、チャマル各2世帯そしてコリー・パテル1世帯の計21世帯である。

### a) 加入年次・組合員年齢

組合設立当初 (1983~85) からという回答が15名と最も多く、次いで90年以降に参加した組合員が5名、その他1名である。特に、1985年に参加した組合員が12名と多い理由は、この年の4月15日に、サルゲール酪農が、酪農協同組合からのみミルクを購入し、これまでのミルク仲買人からのミルク購入はしなかったという取り決めが大きな影響を与えた。市内サンプル世帯の7割が設立に加わっている。年齢では30~40代の主婦が中心である。そして、組合員の名前が母親で実質的にウシの世話やミルク販売はその娘が村内の嫁ぎ先から通う代行する例もある。世帯主21名はすべて男性で、未亡人や離婚者の例はない。教育では識字者はいずれもダルバル世帯の3名だけで、その他はすべて非識字者である。

### b) 労働意識・収入源

何を主な職業とするかという質問に対して、「家族の面倒をみる」という回答が半数の10.5名を占め、「賃労働」(5名)と「酪農」(4.5名)とがほぼ同数、その他が1名となる。主な仕事を「賃労働」と回答したのは、バルワードの1名を除くと、チャマル、バンギー、バグリ、コリー・パテルの各1名で、バンギーの1名を除くと4名はいずれも世帯年収が少ないグループに入る。ついで、「酪農」を主とする組合員4.5名は、バンギー世帯を除くと全てバルワード世帯であり、世帯人数の規模にもよるが世帯年収では中位グループに入る。そして、いわゆる主婦労働と回答した半数は、バグリの1名を除くと、ダルバルとバルワード・コミュニティの女性である。

ついで女性の収入に関しては、ミルク販売、労賃とカウダン・ケーキ (牛糞) の販売などが主なものとして挙げられる。ただ、カウダン・ケーキもウシ飼育によるものであることを考えると、ミ



ルクとカウダン・ケーキの販売は、世帯収入に大きく影響している。基本的には、労賃より畜産・ミルク関連による収入が大きく、しかも労賃よりは安定していると判断する。

#### c) ミルク収入の使用に関する意識と購入と販売に関する決定権

「女性は判断しない」とする解答は、ダルバル女性であるが。販売と購入権と関係するが、「自分のお金」とする場合と「好きなものを買う」と言う9名は、特にジャティーや年齢にも関係がなさそうである。無解答者と「変化なし」と解答した組合員を合わせると11名を数えることから、この問題に関しては、組合員の関心は薄いと判断される、いわゆるミルク収入により女性の家庭内での経済的地位が上がったと判断出来るデータは得ていない。つまり、かつては個人のミルク仲買人にミルクを販売していたのが、1984年にドゥーマリ村に酪農協同組合が設立され、女性によりすべて運営されることで、組合員の家庭での役割変化を何が変化したのか。特に経済的な決定権についてであるが、すべて主人と解答したのが10名である。ただし、コリー・パテルの女性1名は、主人が病気になるので自らが判断し決めている例を除いて、残り10名の会員では、3名(バンギー2名、バルワード1名)の会員が物品の購入を自らがやっている。特に、子供の衣服と毎日の食糧の購入は彼女らの選択で行われている。しかし、バルワード(48歳)会員を除いて、他は全て家畜、家屋や土地の購入は主人が行うとの解答である。

販売に関しては、ミルクの販売だけは9名が自ら行うとするが、他の家畜、土地、農作物や自転車などは2例(バルワードとバグリの各1名)を除くと全て主人・男性である。興味深いのは「生草の販売」は自分が行うとする例の3例(チャマル、バルワード、バグリー1名)は、いずれもミルク販売の例と重なることである。

調査データから明らかになったということではないが、ミルク販売と女性との関係は、これまで家畜飼育をした経験のない指定カースト(チャマルとバンギー)や指定トライブ(コリー・パテルとバグリー)の女性において興味ある関係がありそうということが推察されることをつけ加えておく。

#### d) 酪農研修・成人学級参加の有無

女性組合員の酪農研修は、酪農協同組合の管理・運営に大きな意味を持つ。サンプル21名のうち酪農研修に参加した経験者は、表7の通りSCのバンギー(2名、45歳と38歳)とSTのバグリー(1

名、38歳)の3名のみである。1980年代中頃の研修は、外国からの援助でセワが1986年にデブドレラ(Devdholera)に設立した農村研修センターでの酪農技術習得であろう。セワがこのセンターを中核にしてこの地方での女性の積極的な酪農開発への参加を組織的に進めたのである(Rose, 1992. pp.67-68.)。ドゥーマリ村は、このセンターには至近距離にある割には、研修経験者が少ないように思われる。

ついで、教育に関しては、ダルバルの3名を除くと全て非識字者である。しかしながら、成人教育を希望するのは2名で、いずれも研修経験者のバンギー女性である。このことから、酪農研修が単なる技術取得だけの研修ではなく、人間的な成長への契機となっているように理解される。研修経験者の問題意識が極めて高いのである。

#### e) 酪農組合・SEWAへの要求

酪農協同組合・SEWAへの要求では、搾乳ウシ、特に水牛購入の政府ローンを得易くして欲しいと言う要求(50%)が最も多く、次いで高い乳価の要求(30%)である。その他では、組合に対してボーナスの配給を多くして欲しいという要求とか家畜小屋や水道設備を要求している。一方、SEWAに対しては、生活用水、識字教育と現金に対する要求がある。これらの質問をして、問題だと思ったのは、彼女らが自らの要求を何処にすればよいのかが、必ずしも解っていないことである。調査期間中に一度もパンチャヤット・オフィスが開けられていないし、学校も閉ざされたままである。

短期間の調査であったことにもよるが、閉ざされたままの村役場と小学校に関しては、何も調べられなかった。村の中の女性組合員の要求が、いかなる道筋で達成されていくのかについて、今後さらに検討する必要がある。

#### f) 現在、大事にしていること

21名のうち、第1位に家族・子供と答えた組合員が11名で最も多く、次いで家畜(3名)そして土地、家屋と現金とを各々2名が挙げている。2位以下になると現金を挙げる女性が38%(6名/16名)と増加し、家畜(4名)、家屋(4名)、土地(2名)を上回る。全体的傾向は、女性会員が大切にしているものとして挙げたのは、第1位が子供・家族、第2位がお金そして第3位に家畜がくるようである。ここでも土地や家屋は男性の分野に属する様な理解がされているようである。つまり、家畜は、子供・家族に近い存在として女性会員は関わっているものとして理解できる。

表7 サンプル調査対象の女性組合員一覽

世帯 番号	シャ-ティ	組合員 年齢	研修の 有無	近い将来のウシ増頭希望			酪農組合への要望			SEWAへの要求				現在、あなたが大事にしていること			
				ウシ	タイプ	頭数	1位	2位	3位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
1	Bharwad	24	なし	Yes	水牛	4	Sankar	ローン	なし	なし	なし	家族	子供	家族	子供	家族	
2	Bharwad	30	なし	Yes	水牛	3	Local	なし	なし	なし	なし	家族	子供	家族	家族	家族	
3	Bhangi	45	2回	Yes	搾乳ウ	2	Local	ローン	水道栓	建物	成人教育	成人教育	家族	家族	家族	家族	
4	Bharwad	25	なし	Yes	水牛	1	Local	支払い	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
5	Bharwad	40	なし	Yes	牛	2	Local	建物	必要の水	建物	必要の水	必要の水	必要の水	必要の水	必要の水	必要の水	
6	Bharwad	40	なし	Yes	水牛	5	Local	ローン	現金	現金	現金	現金	現金	現金	現金	現金	
7	Bharwad	38	なし	Yes	搾乳ウ	1	Local	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
8	Bhangi	80	2回	Yes	水牛	2	Sandhar	ローン	水道栓	建物	成人教育	成人教育	現金	現金	現金	現金	
9	Chamar	55	なし	Yes	水牛	1	Local	高い乳価	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
10	Bharwad	43	なし	Yes	水牛	5	Sandhar	乳生産の	無いと	のお金	ローン	ローン	現金	現金	現金	現金	
11	Bharwad	46	なし	Yes	水牛	10	Sandhar	ローン	ホ-ナス	水牛配給	?	?	?	?	?	?	
12	Bharwad	30	なし	Yes	水牛	2	Local	牛小屋	高い乳価	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
13	Bharwad	20	なし	Yes	水牛	2	Sandhar	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
14	Chamar	80	なし	Yes	水牛	1	Local	ローン	水	ウシ	水	水	現金	現金	現金	現金	
15	Bharwad	48	なし	Yes	牛	25	ジェルシー	ローン	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	
16	Darbar	38	なし	No	No	No	No	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
17	Vaghi	38	1回	なし	No	No	No	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
18	Darbar	58	なし	No	No	No	No	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	
19	koil Patel	60	なし	Yes	水牛	1	Local	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	
20	Vaghi	35	なし	Yes	水牛	2-3	Local	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
21	Darbar	45	なし	Yes	水牛	1	Local	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	高い乳価	

(1995年、現地調査による)

### g) 将来の酪農プラン

将来、搾乳用ウシを増やすか増やさないかの希望を聞くと、希望しない3名の他は増頭を希望している。希望しない3名の2名は土地持ちのダルバルで「ウシの飼育は困難である」からという。増頭を希望する18名の9割の女性は水牛を希望している。牛を希望する者は2名であり、その内の1名は25頭（いずれもジェルシー種）を希望するバルワード女性である。水牛希望者の増やしたい頭数の平均は3.3頭余りである。現在、水牛を飼育していない世帯が、水牛を希望する例が7例ある一方で、既に水牛を飼育しているがさらに増やしたい例は、9例ある。前者の例では、現在は牛ばかり20頭を飼育するバルワード世帯の女性組合員が、将来水牛5頭を飼育したいと言う。全体的な傾向として、水牛による搾乳業に収入源の一つとして将来プランを持つていることが解る。ただ、25頭のジェルシー飼育を希望するバルワード女性は1990年に組合加入するまで、村から遠く離れたところにミルクを販売していたので、そのことが最も苦しい経験として述べている。

いずれにしても、企業的酪農プランを述べたのは、ジェルシー25頭を希望する女性のみで、他は現状を大きく変更することなく

### おわりに

伝統的な男性優位社会の特徴を有するインド農村社会において、1970年代以降の「白い革命」の展開は、パブリック・セクターを中心にして推進されたこととあいまって、NGO運動に支援され設立された女性酪農協同組合は、1990年代にはいると中央・州政府により「STEP」プロジェクトとして採用されて、全国の酪農地域において急速な勢いで設立されている。この農村女性酪農協同組合の今後の動きが、将来のインドの酪農の鍵を握っていると言っても過言ではない。

小論では、「白い革命」のホームグラウンドと称されるグジャラート州の女性酪農協同組合の展開と実態を、インド最大のNGOと言えるSEWAの組織化したアムダーヴァード県下ドールカー郡のドゥーマリ村を例にして村の経済と女性組合員により支えられている酪農と女性の労働・意識の状況を明らかにしようとした。

グジャラート州の女性酪農協同組合の展開要因としては、確かにSEWAの影響力は極めて強いものがあるが、それもガンジーやパテルなどインド独立運動で培われた精神、つまり女性の社会参

加意識が高揚した州であることが重要な要因の一つとして挙げられよう。既に1967年にインド最初の女性酪農協同組合がケータグ県下で誕生していたのであり、それはアムール酪農協同組合を支えた精神がその誕生を支援したのである。そして1970年代後半からのSEWAの女性酪農協同組合の組織化は、パブリック・セクターとしてのNDDBやサルダール酪農の支援があったからである。従来のプライベート・セクターを中心とする酪農産業では考えられないことである。

調査対象としたドゥーマリ村は、ドールカー郡下の封建的な村落社会の特徴を強く残した村で、土地はダルバル、家畜飼育はバルワードという二つのジャティー・コミュニティにより支配された村で、その他は後進カーストと指定カーストや指定トライブのコミュニティで、その大半はダルバルに彼らの雇用を依存している。SEWAにより、1984年に設立した女性酪農協同組合は、ダルバル出身の未亡人を書記兼検査係にして調査時点では80数名の組合員を抱えて、ウツム・テイリーにミルクを販売している。政府のローンにより購入した水牛により、年間でミルク販売額が1万ルピーを上回る世帯が、12戸あり、農業労働による収入とともに重要な収入源となっている。現在では、バルワード女性を中心とした組合運営であるが、SEWAの指定カーストやトライブ女性に対する意識的な支援により彼女らの参加意識は高いものがある。それは、酪農業への期待が大きいことで示されている。

ミルク収入が直接、彼女らの村落社会や家庭内での地位向上にどこまで影響したのかについては定かではないが、子供の衣服や食糧購入に関してはダルバル女性を除くと他のコミュニティの女性は3～4割程度が自らの判断で行っている。自作農地が皆無に近い状況では、ミルク収入への依存は今後も続くものと推察する。しかし一方で、1991年からの経済の自由化による市場経済化の浸透は、アムダーヴァードをはじめとする都市への出稼ぎ者を増大させるであろう。それは、地主ダルバルが農業作業の機械化を進めることで、彼らの農業労働に雇われの日数が減少傾向にあるかであり、しかもミルク価格が停滞していることもその要因の一つである。今後多くの課題を残す村でもある。

### 謝辞

本研究は平成7年度の福武財団（代表：福武宗

一郎)の奨学金を利用して調査させて頂くとともに、平成11・12年度科学研究費(基盤研究C)(課題番号11680075)を利用して研究成果としてまとめた。本調査に参加して協力を頂いた井坂理徳(現東京大学大学院講師)、熊野由佳(当時、広島大学大学院生)、福岡教育大学生の井上陽介、岡田順子、未弘めぐみと梶田敦子(当時福岡県立大学学生)と通訳として協力して頂いたグジャラート大学地理学教室や友人(Dr. N. K. Vyas, ISRO 勤務)に感謝したい。なお、この小論の一部が平成7年の南アジア学会(於:広島大学)において報告した。

なお、脱稿後に、中村雪子(現東京外国語大学学生)により、本稿に関する4論文を紹介されたので、記載しておく。

NDDB (1999) : *Women Empowerment Through*

*Dairy Cooperatives in India-Proceedings*, The Ford Foundation, New Delhi, 400p.

Boyd, Christina Genet (1999) : “*We Form Human Chain*” *A Feminist Study of Women’s Engagement With Dairy Cooperatives in Kolhapur, INDIA*, Ph. D (Ohio University), 195p.

Ghanekar, Dattatray V (1997) : *The Empowerment of Women Dairy Farmers In Indian Villages: An Evaluation of the Impact of Three Intervention Programs*, M. A. D, (Ohio University), 192p.

Wayangankar, Arun (1994) : *The Empowerment of Indian Women Dairy Farmers*, M. A. D (The University of New Mexico), 152p.

#### 注

- 1) 白い革命(White Revolution)の用語は、ミルクの色が白いことから「緑の革命(穀物生産の飛躍的発展)」と対比されて、1970年代半ば頃から使われる。その他に、ブルー革命(漁業生産の飛躍的発展)とか、近年ではピンク革命(食肉産業の飛躍的発展)と言う用語が一部で使われている。
- 2) 一般にアーンンド・パターン(Anand Pattern)と呼ばれ、村落レベルにある農村酪農協同組合(ミルクの集荷機能)と県の中心にある県酪農協同組合連合(ミルクの加工・販売機能)との二段階方式のシステムを言う。
- 3) STEPは、1986年12月にティルパティ(Tirupati)で開催された国内セミナー「酪農業における女性」の席で酪農運動における女性の役割についての研究が公開された。その席に中央政府の農業省の役人が参加していた。その彼が人的資源開発省の女性・子供開発局の女性官僚に好意的に話した。それで、その女性が支援と就労向上(Support to Employment Promotion)と呼ばれるプログラムを発展させたのがSTEPの始まりである。特に、アンドラ・プラデーシュ、ビハールそしてカルナータカ州で建議された。1991年3月には、このプログラムはハリアナ、ラージャスターンそしてウツタル・プラデーシュ州に採用され、それ以後は、各州で好意的に受けとめられ、益々このプログラムでの女性酪農協同組合の設立が相次いでいる(Srinivasan, Viji, 1993, pp.94-95.)。
- 4) 基本的に組合のデータはセワ事務所で保管される。そのために、本来組合事務所に保管されるべきデータがなく、セワから持ち帰っていた組合員名簿(1992年)を利用した。書記の話では、最近3年間のデータはセワが管理するという。
- 5) Patel, S. V. J (1875-1950)は、同じグジャラート出身のガンディーの右腕として活躍。インド民族資本とつながり、国民会議派の組織体系の確立に貢献。独立後は、副首相・内相としてネルーを支えた(出典:『南アジアを知る辞典』平凡社, 1992. pp.553-554)。
- 6) ちなみに、1984~85年では、組合数が870、組合員が358,705人で、そのうち女性組合員は44,635人では、総組合員の12.44%を占める。同じく、現地調査時点での1995年(1~3月)では、組合数は954で、組合員は532,670人、そのうち女性組合員が78,770人で総組合員の14.79%を占めている。1995年現在で、酪農地域(Milksheds)単位でみると、表8の通り、全国ではカルナータカ州のライチュール酪農地域では47%と50%に迫りつつある。同じグジャラート州では、カイラ酪農地域と並ぶ酪農先進地であるメーサナ酪農地域で女性組合員の割合が高く32.7%である。
- 7) メーサナ県ヴィジャープル(Vijapur)郡にある酪農村。1991年センサスでは、人口2,324人(441世帯)で、耕地の大半はチューブ・ウエルで灌漑され、綿花と牧草栽培と搾乳牛飼育(水牛からH・F(Holstin-Frizien)飼育に転換)で、経済的に豊かな酪農村の一つである。現地調査(1991)は終えた

表8 女性組合員割合の高い酪農地域 (1995)

順位	州名	県名	member		女性の割合 (%)	指 定			指定割合 (%)
			Total	women		caste	tribe	C+T	
1	Ka	Raichur	39399	18519	47.0	3576	2048	5624	14.3
2	U.P	Sitapur	13851	6450	46.6	3867	0	3867	27.9
3	Ka	Gulbarga	58117	24998	43.0	8745	1294	10039	17.3
4	T.N	Madurai	159106	65863	41.4	59194	0	59194	37.2
5	Bi	Gaya	2288	923	40.3	452	0	452	19.8
6	T.N	Pudukkotai	22650	8592	37.9	5346	0	5346	23.6
7	T.N	D'gull-Anna	103111	39031	37.9	34778	0	34778	33.7
8	T.N	Trichy	146555	52903	36.1	40178	287	40465	27.6
9	—	Pondicherry	18540	6319	34.1	4363	0	4363	23.5
10	Gu	Mehsana	292800	95800	32.7	11200	9400	20600	7.0

資料：NDDB 資料

が、レポート作成に至っていない。近年の自由化・経済の個人化の影響を調査して、その変化を中心にまとめる予定である。

8) パルダは、いわば「女性隔離」であり、特にヒンドゥー・ベルトの農村社会に残っているが、30年前のフィールド調査で経験時の頃と比較すると、現在は大幅に変わり、村によっては消滅している。

#### 参 考 文 献

- 甲斐田真智子 (1997)：「働く女性の声を政策につなげる SEWA」, 斉藤千尋編『NGO 大国インド』, 明石書店, 55-86頁。
- 喜多村百合 (1999)：『インドにおける代替型開発の人類学的研究—SEWA (女性自営協会) の sangam 運動を中心に』, 学位請求論文 (九州大学)。
- 篠田隆 (1995)：「グジャラート州の清掃人カースト」押川文子編『叢書カースト制度と被差別民第5巻—フィールドからの現状報告』, 441-500頁。
- 中里亜夫 (1995a)：「インドの女性自立と酪農協同組合運動—セワ (SEWA: Self Employed Women's Association) の運動を中心に—」, 中里亜夫編『開発教育 (Development Education) の基礎的研究—特定研究 (平成4年度～6年度) 研究成果報告書』, 157-190頁。
- 中里亜夫 (1995b)：「マルチ・カースト村落における差別的就労と指定カースト・指定トライブ—中部グジャラート, ケーダー県の灌漑農村・アンバーブ村の例—」, 押川文子編『叢書カースト制度と被差別民第5巻—フィールドからの現状報告』, 533-579頁。
- 中里亜夫 (1995c)：「インドにおける酪農業の発展と酪農協同組合運動」, 福武学術文化振興財団編『平成6年度年報』, 110-116頁。
- 中里亜夫 (1998)：現代インドの移動牧畜民—ライカ, バニ, パルワードとグジャールの事例, 『日本地理学会発表要旨集 No.53』, 318-319頁。
- 中里亜夫 (1999a)：「インドの協同組合酪農 (CooperAtive Dairying) の展開過程—OF プロジェクトの目標・実績・評価を中心に—」, 福岡教育大学紀要 第47号 第2分冊, 100-116頁。
- 中里亜夫 (1999b)：『インドの「白い革命」に関する文献的研究』, 平成7・8年度文部省科学研究費補助金, 基盤研究C報告書, 114頁。
- 柳沢悠 (1995)：「農村社会の経済変化と諸カースト—下層階を中心に—」押川文子編『叢書カースト制度と被差別民第5巻—フィールドからの現状報告』, 501-532頁。
- Bhatt, Ela (1996)：'Women in Dairying', in Gupta, P.R., ed (1996) : *Dairy India 1997*, pp.49-50.
- Chen, Martha Alter (1991) : *Coping with Seasonality and Drought*, Sage, New Delhi, 254p.

- Chen, Marth and Mitra, Manoshi (1982) : *Indian Women—A Study of their Role in the Dairy Movement*, Shakti books, 153p.
- Gupta, P. R., (1996) : *Dairy India* 1997, 903p.
- NDDB (1979) : *National Dairy Development Board Annual Report 1978-79*, 90p.
- Patel, Amrital (1996) : 'Operation Flood: The Next Step', Gupta, P. R., ed (1996) : *Dairy India* 1997, pp.37-39.
- Rajyagor, S. B (eds) (1984) : *Gujarat State Gazetters—Ahmadabad District Gazetter*, 943p.
- Rose Kalima (1992) : *Where women are leaders-The SEWA movement in India*, Vistar publication, New Delhi, 286p.
- Shah, Dilip (1992) : *Dairy Cooperativization—An Instrument of Social Change*, Rawat Publications, New Delhi, 171p.
- Somjee. A.M. and Somjee. G. (1976) : 'Managerial Shift—Indian women acquire a new role in dairying—', *World Animal Review*, No.18, pp.28-33.
- Srinivasan, Viji (1993) : *Indian Women—a study of their role in the handicraft and dairying sectors*, Har-Anand Publications, 190p.
- United Nations (1981) : *Participation of Women in Dairy Development in South Asia*, World Bank Report, 79p.